

「堺」の興亡と“まち”文化

<引用文献>

- ・角山 榮；『堺 - 海の都市文明 』（PHP研究所、2000年2月）
- ・角山 榮；講演『お茶文化と“もてなし”の心』（大安寺、平成15年6月21日）
- ・豊田 武；『堺 - 商人の進出と都市の自由』（至文堂、昭和41年）

市民活動団体“堺なんや衆” 前田秀一

1. “堺” 繁栄の150年

- ・1469年：遣明船、堺港に入港（応仁・文明の乱にて兵庫港入港できず）
- ・1615年：大坂夏の陣にて堺戦火焼失（堺繁栄の終わり）

146年〔明治維新（1868年）⇒現代（2003年）=135年〕

・150年の繁栄の内訳

- ・前半期（1469年～1550年=81年）

東アジア貿易

遣明船貿易：1469年～1523年

琉球貿易：15・中頃～16世紀（琉球は、対明貿易を軸にハブ港的役割、毎年遣明船派遣）

- ・後半期（1550年～1615年=65年）

南蛮貿易

1550年西洋からの宣教師フランシスコ・ザビエルが、琉球経由で弥次郎の案内により、布教を建前に、貿易による銀の収入を本音の目的として来堺

・繁栄時の堺の位置づけ

①国際貿易都市、町人による自治都市

ヨーロッパとほぼ同時期、歴史上最初の「都市ブルジョワジー（商業ブルジョワジー）」台頭

従来：労役の収奪や農産物の貢納 ⇒ 新規：商業利潤の蓄積を基礎に形成された富

都市有力市民の財力、経済力 例. 納屋衆 10人

②政治、経済、軍事戦略上重要な地位

カネ、武器（鉄砲の生産地）、内外情報の調達基地

2. 15～16世紀ー日本の世紀ーアジアは、世界で最も開発が進んだ文明の中心であった

“東アジア海域”と“東南アジア海域”とは元来一体化した経済圏として活況を呈し、物産の交易のみならず文化交流も盛んに行われた。そこへ、ヨーロッパが参入してきた。

- ・東アジア貿易圏：中国産生糸、絹織物、陶磁器
- ・東南アジア貿易圏：香料（スパイス）、木綿

「海」は、古代からヒト、モノ、情報の遠隔交流の場として重要な役割を果たしてきた。
その交流の中から、経済発展が生まれ、文化が醸成される。

・文明の大陸伝播から海洋伝播へ

14～15世紀、元寇の敗北以後、中国の制海権が衰退し、日本人、琉球人が海洋民族として積極的にアジア海域へ進出した。

・日本の参加、堺の参加：

- 1404年：日明勘合貿易、朝鮮への交易拡大
- 1469年：遣明船堺港入港
- 1550年：南蛮貿易（フランシスコ・ザビエル来堺）
- 1635年：鎖国令（ヨーロッパ勢の侵入を防ぐ。徳川家康、貿易窓口をオランダに絞る）

・日本に国際都市（交易拠点）誕生：

- ①生活文化（木綿：インド）、生活革命（香料、スパイス：西アジア・イスラム教国）伝来
- ②東南アジア貿易中心軸の強化（商業資本主義台頭）：香料取引（中国明王朝の繁栄）

3. アジアの「海」を変えた日本の銀

- ・取引手段としての銀、金の供給元（“黄金のジパング”）
- ・日本の銀を目指して世界が動く時代の到来（宣教師の来日）

銀の供給（16世紀）

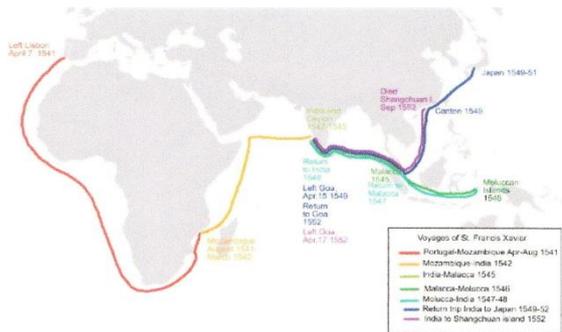
中国、ベトナム北部、日本、メキシコ

（ヨーロッパは産出量が少なく、銀の海外持ち出し禁止）

宣教師

本音：金、銀獲得 建前：布教開拓

・アジア貿易のメカニズム



「大航海時代」の狙い

アラブ人・インド人・中国人経由のアジア情報、生活必需品を直接入手、領土拡大（植民地化）世界戦略

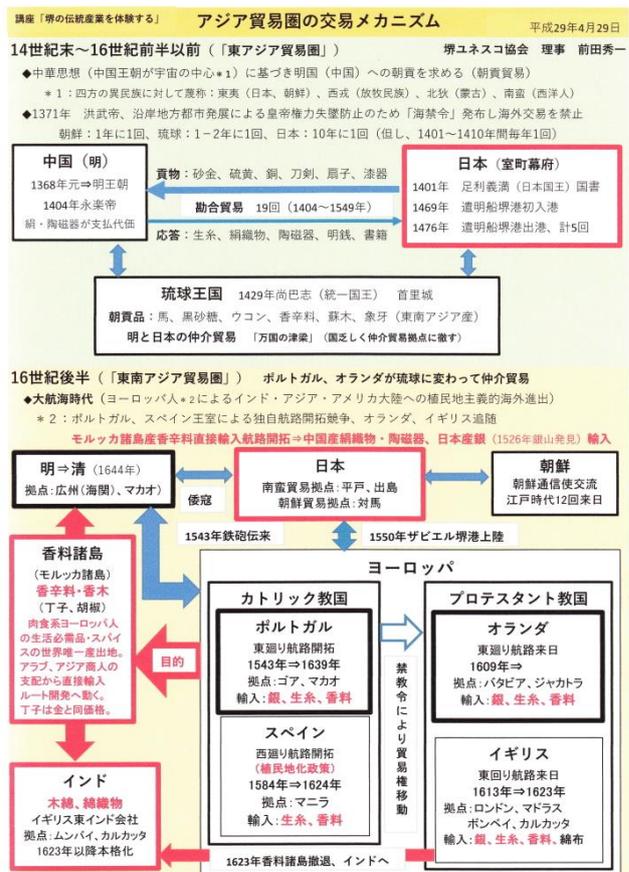
琉球王国の輸出入品

< 輸出品 >

- 日本： 蘇木、胡椒、象牙、丁香、絹織物（中国産）
- 中国： 馬、硫黄、磨刀石、刀剣、銅、東南アジア産物
- 東南アジア： 磁器、硫黄、鉄、絹織物（中国産）
- 朝鮮： 胡椒、蘇木、象牙、沈香、錫、扇（日本産）

< 輸入品 >

- 日本： 漆工芸品、刀剣類、各種手工芸品、銅、鉄、金
- 中国： 磁器、絹織物、生糸、鉄製品、多種類の織物類
- 東南アジア： 蘇木、胡椒、錫、丁香、沈香、木香等香類、龍腦
- 朝鮮： 綿布（インドベンガル産）、多種類の織物類、酒



・ポルトガルの戦略

- 1511年：マラッカ占領（マレー半島）
- 1557年：マカオ基地確保

cf：角山 榮；『堺と南蛮貿易』

・その後、ヨーロッパ参入

1571年：スペイン マニラに基地設定

1581年：オランダ

1581年：スペインから独立宣言、ネーデルランド共和国設立

1609年：徳川家康から通商自由の朱印状取得、平戸に商館設立、ポルトガル排除

1648年：ヨーロッパで独立国として承認

_____年：イギリス

4. アジア勢力の後退

●活発な自由通商海域 ⇒ 農業国化（西欧諸国の植民地化、半植民地化）

- ・中国、朝鮮の海禁政策、日本の鎖国

ヨーロッパ勢が国内侵入を防ぐ為、最小必要交流の窓口を除き、国を閉ざす方法を選択

結果としては、アジア的価値*1のヨーロッパ的価値*2への転換を防ぐことになった

*1：人間関係の形成、集団の価値 → 儒教

*2：個人主義、個人の価値 → 一神教（神と個人のつながり：キリスト教）

- ・21世紀は、ヨーロッパ的価値とアジア的価値が対立、衝突する「文明衝突」の時代
歴史的に、16世紀の二つの価値の対立の再現
 - ・ヨーロッパの近代的軍事力と無防備に近いアジア海域
 - ・アジア的華夷秩序は、強力な西洋軍事力の前にどう対処するのか

5. “堺商人”の富はどこへ行ったか？

1) 堺の“まち”文化と商人

- ・富の蓄積に応じて、京都の公家文化と奈良の寺院文化を併せ摂取しながら、その文化を次第に堺の“まち”衆の趣味に合うものにつくり変えていった。

例、茶の湯、連歌、能楽

- ・京都の“まち”衆文化が、酒屋や土倉を主体とするに対し、堺の文化は、貿易や海運業者を中心に発達したところに規模の大きさ、異国趣味をも取り入れて市民文化の黎明を告げるに相応しい明るさを持っていた。

2) 堺商人と対峙した商人およびその心得

- ・堺：「もてなしの心」、「人間関係の形成」⇒ 相互友好、信頼関係 ⇒ 「信者」⇒ 「儲」

<茶の文化の本質> 茶（CHA）という飲み物を媒介として

C：Communication「ふれあい」、H：Hospitality「もてなし」、A：Association「人間関係の形成」

- ・博多：「負けぬが勝ち」

「勝とうとう思って打つべからず、負けじとって打つべし」

- ・大坂：「儉約、始末」、「どけちの心」

⇒ 芝居、浄瑠璃など町人文化を育成

⇒ 町人学校「懐徳堂」設立 ⇒ 教育

- ・近江：冒険的な旅商人

「三方よし」＝「売り手よし、買い手よし、世間よし」＝「Give and Take」

3) 堺の「黄金日々」の衰退

- ・堺商人の栄華は、豊臣秀吉の牽制を受けて大坂に移動させられ、大坂夏の陣で大火に遭遇し決定

的な被害をこうむった（1615年）。また、徳川幕府により商人の位置づけが「士農工商」と社会秩序の中で最低の格付けに据え置かれた。

- ・徳川時代の堺商人は、京都、江戸の商人とともに与えられた長崎での生糸取引の特権（糸割符）の上に居座ったまま、かつての雄飛した冒険商人の魂はなく、その特権を守るだけの保守的な商人になってしまった。だから、堺は「長者の隠れ里」ではあっても、大坂商人の懐徳堂のような町人の教育機関の誕生はもとより、近江商人のような冒険的な“旅商人”を生み出すことも無 4/5 った。堺は、16世紀に繁栄した商人の町から、江戸時代は職人の町へ代わっていった。
- ・1704年大和川が付け替えられ、堺港が土砂で埋まり大型船舶の入港が出来なくなり貿易港としての役目を果たさなくなった。反面、大坂が水の都、商人の“まち”として栄えることとなった。
- ・堺の人たちの多くは利を追うに忙しく、向学の志がはなはだ薄く、学問で名をなす者が居なかった。堺の環濠の町は、閉鎖的で、当代最高の詩人、文人たちを温かく迎える知的環境に無く、また、文化および教育の醸成に尽すこともなく、文化の衰退とともに町も衰退した。

4) 堺商人の富のゆくえ

① 応仁・文明の乱（1467～1478年）で荒廃した京都の復興

特に、大徳寺（1319年大燈国師創建、臨済宗大徳寺派本山）の再興に尽力

- ・室町幕府の保護下にあつて、座禅一道に徹し枯淡の禅を護持
- ・応仁・文明の乱（1467～1478年）で伽藍焼失
- ・一休宗純に帰依した堺商人（尾和宗臨、淡路屋寿源）が復興資金を調達、寄進
1473年：伽藍、1479年：仏殿、1481年：正門、偏門再興

② 寺への寄進

- ・堺の“まち”は、“金（カネ）”の力で作った自治都市
歴史上唯一の“都市ブルジョワジー”（商業ブルジョワジー）
- ・金銭的富をはじめて手にした商人たちの生き方 ⇒ 「安心立命」
当時は、金儲けは、必ずしも“善”ではなかった ⇒ 寺への寄進
- ・堺は17世紀に、「泉南佛国」（寺の町）に変化

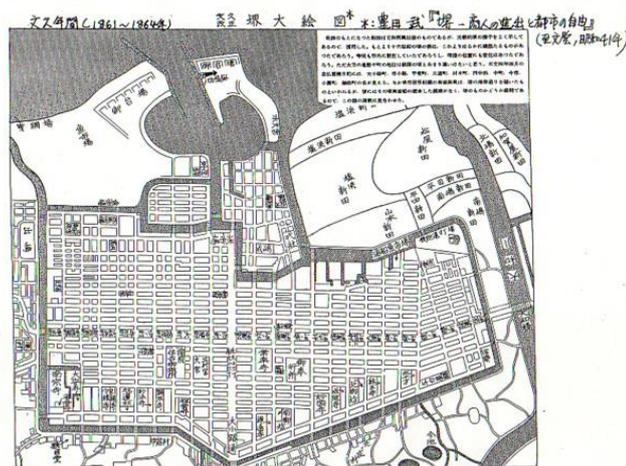
環濠の東側一帯 約300寺（寺院：225寺、その他：70箇所）

全ての宗派があるが、本山が無く、閉鎖的な“まち”域となる。

（昭和初期：天台宗：5、真言宗：15、浄土宗：58、禅宗：15、真宗：41、日蓮宗：28
融通念仏宗：2、時宗：3、その他：1、計168寺院）

代表的なお寺と寄進した堺商人：

- ・南宗寺：臨済宗大徳寺派別格寺 武野紹鷗（たけのじょうおう）
- ・大安寺：臨済宗東福寺派 ルソン（納屋）助左衛門（居宅） 重要文化財



③茶の湯の文化へ全ての財産を投入 cf：角山 榮；『世界史から見た 中世・堺の茶の湯』

- ・宣教師ジョアン・ロドリゲス（ポルトガル人、1561～1639年：1577年15歳で来日）は、日本についての30年間の研究の成果を『日本教会史』（全3巻）に著し、その第1巻に「もてなしの文化」について書き残した。
- ・本来の“もてなし”とは、応接、礼儀作法、料理、酒、お茶と豪華な宴会のもてなしを基本としていたが、応仁・文明の乱（1468～1486年）、戦国時代（1490～1570年）など、下克上の無秩序の世の中にあっては、そのような接待宴会が成立しなくなり、やむなく、その一式を凝縮した形で最後のお茶席だけを独立させ、人間不信の時代に人間相互の信頼関係の回復と新たな人間関係の形成を目指した作法が創造された。
- ・家の造り、造作、作法を徹底して凝縮し、主人が、客の目の前で全てを公開しながら濃い茶をたて、廻し飲み（毒物注入の嫌疑を払う儀式）をしてもてなし、信頼感の漂う人間関係の形成を目指した。その空間は、身分を離れ、主客対等で、安全が保証された聖なる空間として位置づけた。
- ・イエズス会の宣教師たちにとっては、奇妙な文化と見られた。
 - 高価な茶、茶碗、茶道具、くぐり戸、狭い部屋の堅苦しい作法・儀式
- ・千利休の茶の哲学：
 - 「一期一会」：人と人の出会いを大切にして、互いに信頼ある人間関係を築く
 - 「和敬清寂」：心をやわらげて敬う心が、涅槃の境地と一致する

6. 近代に何が受け継がれたか？

1) モノのはじまり

- ・「新堺音頭」 作詞：山本梅史（1886～1938年、「ホトトギス」の同人）、作曲：細田義勝
「物のはじまりや なんでも堺 三味も小唄もみな堺」

<中世～近世>

- ・鉄砲、線香、タバコ包丁、三味線、金魚、傘、鳥毛、菱垣廻船、堺更紗、緞通、謡曲（喜多流、宮尾流）、江戸浄瑠璃、劇場、隆達節、銀座

<明治以後の近代>

- ・私鉄—阪堺鉄道（1885年）、木造様式灯台、瓶詰め酒、水練学校（1906年）、学生相撲（1919年）、商業定期航空（1922年）、自転車（明治30年代の初め）、ショベル・スコップ（1887年）、機械縫製足袋、足踏み回転脱穀機、セルロイド工業、フロン式冷凍機

2) 明治維新以後近代の繁栄を支えた産業

明治20（1887年）年ごろの売上高順位（『堺市史』第3巻）：

	数量	金額（千円）
①清酒（千石）	52,275	549
②緞通（千疊）	79	111（絹、木綿織物の伝統的技術）
③醤油（千石）	10,830	60
④煉瓦（千個）	70,500	37（古墳時代から連綿と続いた焼き物の技術）
⑤菜種油（千石）	2	33
⑥諸刃物（千個）	424	25

以上